



自分が変わる必要性

児童養護施設 梅ヶ丘学園
施設長 中 屋 浩 二

社会的養護出身の当事者に限らず、最近の若者の問題としてニートやひきこもりで社会に出られない人たち、就職してもフリーターであったり、派遣などの非正規雇用として働き始めたものの、長く続かないということでの貧困問題が、マスコミで取り上げられることがあります。

それらの要因を「施設養護出身者だから」という括りで、理由付けされること自体、乱暴な話で、風評被害に陥ることもあるので、当事者にとってみれば迷惑な話です。

当園では私が施設長になってから縁あって、2人の児童養護施設出身者を雇用させてもらっていますが、ある時、その内の1人が「施設出身者は敬遠されると聞いていたので・・・」と採用された時の安堵感を語ってくれました。

個人を見なければならぬ立場の人たちが、生い立ちを重視するとしたら、そのことをこそ問題視しなくてはなりません。

誰も差別を受けてはならないし、公平に扱われなければならないからです。

しかし、逆の言い方をするなら、施設養護出身だからといって特別扱いされるのはどうかと思います。

だから卒園される皆さんには、自分磨きをして、雇用主から選ばれる人材となってもらいたいと思います。

施設生活から離れ、実際に社会に出て働いてみると、仕事内容の大変さだけではなく、人間関係の難しさ、「何でこんな目に遭わなきゃあならないのか」という理不尽さも経験するかもしれません。

「私は悪くない」という無意識のつぶやき・・・

でもどれだけあがき、もがこうが事態は何も変わっていかないという現実・・・

私自身若かった頃、そんな現実と直面し、辟易としていました。でもある言葉に触れ、そこから考えを改めることができました。

「苦しみ悲しんだ痛みの中に、すでに呼びかけはあなたに届いている。偶然ではなく必然。全てのことに意味がある」

この言葉に触れた時、涙が溢れました。「私は孤独だった。本当は皆の和の中にいたかった」そのことに気付いた瞬間でした。

自分が変わる、それによって事態は変わっていくという道理によって、それまで主導権を放棄し、責任転嫁し、自分の人生を生きてこなかった、ということに気が付きを得ることができました。

卒園してから何年か経って、この本を手にとって読まれている方もみえるかと思います。

私はそれまで転職を2度ほどして、児童福祉の世界に入職したのが29歳の時でした。

遅いなんてことはありません。

皆さんには、生い立ちを了承し、偏見を持たず、応援して下さるルーキーズの皆さんが待っています。

自分の人生の舵取りをして、誰かの期待に応える生き方を選んだ時、それまでとは全く別の人生が展開されていくはずです。

私も応援者の一人として「この人生だったからこうなれた」そう思える人生を送っていただくことを切に願っています。